

### 3 番組解説

## 1 放送局

「1 はじめに」で引用した『週刊TVガイド』昭和46年10月1日号の記事によると、NETテレビ（関東広域圏）、毎日テレビ（近畿広域圏）、中京テレビ（中京広域圏）、KBCテレビ（福岡県）にて放送を開始する旨が書かれている。しかしながら、実際に関西地区で放送を行っていたのは、昭和50年3月までは毎日テレビではなくサンテレビ（兵庫県・大阪府等で視聴可能）と近畿テレビ（京都府・大阪府等で視聴可能）であった。また、前掲記事での言及はないが、広島ホームテレビ（広島県）、瀬戸内海放送（香川県・岡山県）、北海道テレビ（北海道）でも放送初回から放送を行っていた。おそらく、NET（後にテレビ朝日）ネット局にて全国同時放送を行っていたものと思われる。

なお、関西地区での放送は、半年ぶりの再開となった昭和50年9月より毎日テレビが担うようになった。中京広域圏での放送は、昭和48年4月より名古屋テレビが担うようになったが、これは同月より中京テレビが日本テレビ系列のフルネット局となり、名古屋テレビがNETとの単独ネットとなったことが起因していると思われる。

また、「なつかしの歌声」や「帰ってきた歌謡曲」にはない特徴として、アメリカ・ロサンゼルスでも毎週放送されていた点が特筆すべきである。昭和47年2月14日放送分の第20回の台本には、司会の加東大介がハワイ出身の灰田勝彦に対し、「灰田さん、この番組はね、ハワイやロスアンゼルスでも放送されていて、むこうの日系人のかたがたのあいだでたいへんな人気なんだそうですよ。アメリカの有名な作家のヘンリー・ミラー氏もこの番組のファンなんですって」と話した後、司会の山東昭子がロサンゼルス在住の視聴者からのリクエストの手紙を灰田に渡すというシーンが描かれている。実際に、昭和47年1月27日付読売新聞東京版朝刊には、「ロスで大もて NETのビデオ」と題する以下の記事が載っている。

昭和のベスト・セラー曲を集めたNET系「にっぽんの歌」（月曜午後9・00）は、構成のよさと加東大介の親しみのある司会ぶりでも好評だが、国内ばかりでなく、海外でも人気を呼んでいるようだ。

ロサンゼルスを中心に行っているKWHY（22チャンネル）で、日曜夜八時から十時十五分まで二時間余り日系人向けに放送中の「日本語アワー」。このKWHYの放送圏内には、在留邦人、日系人など約十万人がいる。

この時間には、日本から「宮本武蔵」はじめ、ローカルニュースなどが、VTRのパッケージにして送られているが、この時間だけは、いつもにぎわう映画館のすし屋も閑散となり、各種のパーティーも八時前に必ず終了する慣例になっているようだ。

こういうファン層にとって「にっぽんの歌」は、まさに望郷の思いを満たす番組らしい。

番組の“心の歌”コーナーに対するたどたどしい日本語や洗練された英文のリクエスト・カードが、五十通余りもNETに送られてきている。

ヘンリー・ミラーとホキ徳田夫妻もロサンゼルス在住で、熱心なファン。ホキの解説でミラー氏もすっかり日本の歌をおぼえたそうで、そんなウワサも人気を助長、このテレビ局がUHF式なので、U波のはいるテレビ受像機に買い替える家庭も多いそうだ。

また、昭和48年6月26日付朝日新聞西部版夕刊にも、「ロスでも好評『にっぽんの歌』」と題し、以下のように紹介されている。

この「にっぽんの歌」は日系アメリカ人の多いロサンゼルスで大好評、同市の日系人家庭の八五%がこの番組を放映しているKWHYテレビにチャンネルを合わせているということだ。

昭和47年2月21日放送分・同年11月20日放送分・昭和51年2月2日放送分では、それぞれロサンゼルス視聴者からの手紙や反響が取り上げられ、昭和50年3月10日・17日放送分ではロサンゼルス公演も行っている。

## 2 放送期間ごとの詳細

### (1) 第1回～39回(昭和46年10月～47年6月)

#### ①放送開始当日の新聞紙面

昭和46年10月4日からスタートしたこの番組であるが、同日付の新聞紙面では以下のように紹介されている。

昭和の名曲、愛唱歌で構成する歌謡番組。(朝日新聞東京版/西部版/名古屋版朝刊)

昭和のベストセラー曲を中心に、ロズさんだ歌、ヒットした歌や時の流れを越えた名曲を戦前、戦中、戦後、現在の人気歌手とともにふりかえる歌謡番組。(朝日新聞大阪版朝刊)

昭和のヒット曲を中心に名曲、愛唱歌をさまざまな趣向で構成する歌謡番組。(朝日新聞北海道版朝刊)

“なつかしのヒット・パレード” “今週のハイライト” “リクエスト・コーナー” の三部構成で、主として、昭和のベスト・セラー曲の再登場となる。(読売新聞東京版朝刊)

ヒットした歌、一般に親しまれた歌や名曲など、昭和のベスト・セラー曲で構成する。(毎日新聞東京版朝刊)

懐しい歌、ヒット曲、愛唱歌などをいろいろな趣向をこらして構成する歌謡新番組。(毎日新聞東京版夕刊)

日本における愛唱歌、ヒット曲、名曲をいろいろな角度から取り上げる歌謡番組。主として、昭和の歌を対象としている。(中日新聞朝刊)

「1 はじめに」(本書2ページ)で引用した『週刊TVガイド』昭和46年10月1日号の紹介記事では「第3の“なつメロ”番組」と紹介されているのに対し、新聞紙面では「なつメロ」(または「ナツメロ」「懐メロ」)という表現が用いられていないことに気がつく。遡ること一年半前の昭和45年4月にスタートした「帰ってきた歌謡曲」の放送

開始時には、「最近全盛の”なつメロ“の良さを若い人たちに紹介する番組」（昭和45年4月2日付読売新聞東京版朝刊）などと紹介されていたこととの差異が印象的である。

## ②司会者

男性司会者は加東大介、女性司会者は第26回までが山東昭子、第27回以降が松任谷国子であった（山東から松任谷に司会交代した経緯は不明）。

放送初回の昭和46年10月4日付朝日新聞北海道版朝刊及び毎日新聞東京版朝刊には、加東・山東とも「歌謡番組初登場」であることが紹介されている。昭和46年11月8日付朝日新聞北海道版朝刊に、加東が司会者を引き受けた経緯が「“心の歌”は『戦友』」と題する記事で載っているため紹介したい。

HTBテレビの「にっぽんの歌」（月曜、夜9時）で司会者をつとめている加東大介。歌謡曲番組の司会を……という交渉を受けたときは「先天的オンチ」と自認していただけにびっくりしたそうだ。話をよく聞いてみると、曲にまつわるエピソードなどを歌手やゲストに語ってもらう聞出し役、いわば「よき話し相手」になればいいということがわかり、それなら、と引受けたという。

「歌謡界のことはなんにも知らない。いつでも即席の下調べ。これは役づくりと同じで習慣になっているので、それほど苦にはならないし、自分を広げるといふ楽しみがある」という加東の「心の歌」は「戦友」だそうだ。

加東は歌謡界のことをほとんど知らなかったため、下調べを丹念に行って司会に臨んでいた。

小川知子、クールファイブもほとんど知らない。それで、司会の前には下調べを懸命にやる。

「クールファイブは、長崎でボーカルグループを結成して有線放送で人気が出たとある。有線放送って何か？でまた調べる。まあ下調べは役づくりと同じで習慣になってますし、まるで違う世界の人と会えて自分を広げられるという楽しみがありますなあ。熱心に調べて、楽しんで人に会う。こんな気持ちが彼の司会態度に、ういういしさとなって出るから、茶の間に好評なのだろう。（「加東大介 音痴でも楽しんで熱心に」、昭和46年11月7日付読売新聞東京版朝刊）

こうした勉強熱心で誠実な加東の司会ぶりは、以下の記事が示すように好評であった。

思い出の曲に託してさまざまなゲストの半生を紹介するNETテレビの「にっぽんの歌」（月曜夜9時）は、いわゆる“なつメロ番組”の一つの典型だが、司会者加東大介の、決してうまくはないが誠実な司会によって、しみじみとした味わいを出すことに成功している。（「感慨催させるなつメロ番組」, 昭和47年6月29日付朝日新聞西部版朝刊／「なつメロ番組が伝える感慨」, 同日付朝日新聞名古屋版朝刊）

司会の加東大介が歌には素人なのに、非常に善戦してた。“演歌とは何ぞや”なんてことまで調べたメモを持参したり、さすがだったけど…（『週刊明星』昭和47年7月16日号）

### ③番組構成

国立国会図書館所蔵の台本は、第66回を除き、残りの24回分はすべて第39回までの放送初期のものであった。これらの台本によると、初期の頃は以下のような構成であった。

- ①オープニングテーマに続き、「歌は生きている 人の命のある限り 歌は生きつづけ 燃えつづける 心に輝く太陽のように」のナレーション。
- ②司会の二人のオープニング口上  
加東：加東大介です。  
山東：山東昭子です。  
加東：若いも若きも、すべての人の心の歌を集めた「にっぽんの歌」です。  
山東：今日うたって下さるのは、この方々です。
- ③オープニング・メドレーで出演者が順番に登場し、本日の放送内容の紹介。(オープニング・メドレーは演奏のみの回もあれば、第一部の出演者がワンコーラスずつ歌う回もあった。)
- ④第一部は、幅広く様々な出演者が思い出のヒット曲を歌う“思い出のヒットパレード”。順番に出演者が登場しトークの後、一曲ずつ歌う。
- ⑤第二部は、日本の歌の長い歴史の中に、大きな足跡をしるしている歌手を毎週一人ずつ迎える“今週のハイライト”。思い出話を聞いたり、ヒット・メドレーを歌ってもらう。
- ⑥第三部は、各界の有名人や視聴者の”心の歌”を紹介する“私の心の歌”。視聴者からのリクエストを紹介する回では、「視聴者代表が出演→視聴者が書いた手紙を女性司会者が朗読→歌手が登場し視聴者代表を交えておしゃべりした後、“心の歌”を歌ってもらう」という構成であった。
- ⑦エンディングでは、誰もがよく知っている懐かしい歌を出演者全員で合唱。

### ④番組への反響

第2回放送後の昭和46年10月14日付読売新聞東京版朝刊に、「演出の巧みさに引かれた」との見出しによる記者の感想が載っており、番組構成を褒める内容となっている。

十一日のNET系「にっぽんの歌」が楽しかった。菊池章子の「星の流れに」、池真理子の「愛のスイング」……第一部の「思い出のヒット・パレード」でナツメロを聞かせ、その間を司会の加東大介と山東昭子がつづる。まったくスレていない加東のおだやかな司会ぶりがまたいい。(中略)

こうなると、歌のうまいまじいではない。三部構成の巧みな演出にいつしか引き込まれてしまう。ナツメロといってもあながち古い歌ばかりではない。一節太郎の「浪曲子守唄」を聞くと、もうあれから八年もたったのかと別の感慨が胸に迫ってくる。歌の流行は早く、忘れ去られるのも早い。しかし歌はいつも生きている。(後略)

また、翌10月15日付読売新聞東京版夕刊に、秋の新番組の視聴率の行方を紹介す

る記事が載っているが、「新形式のなつメロ『にっぽんの歌』が、前番組の『ヒットで勝負』が六、七%と低迷していたのに比べ、なつメロのブームに乗って一〇%と二ケタをとった。」と紹介されており、好調な出だしであったことが伺える。

放送開始から5か月が経過した昭和47年2月17日付読売新聞東京版朝刊には、「潤いある歌が聞ける番組」との見出しで、記者による番組評が載っており、番組が軌道に乗った後も高評価を得ていたことが伺える。

(前略) 歌謡曲のファンの一人としては、たまには一年前二年前にはやった、まだ“なつメロ”になり切っていない新しさがある歌を、もう一度その歌手で聞きたいのだ。そんな思いを、NETの「にっぽんの歌」がときどき満たしてくれる。(中略) この番組、いうならば“なつメロ”とヒットパレードの中間に行く趣向。まだ古びていない歌を、歌手に一種のなつかしさをこめて歌わせるところに、落ち着いた潤いが出るのだろう。

(中略) ヒットパレードの番組では、笑って仲よくしているようでも、底にライバル意識を秘めた白々しさを感じるが、ここにはそれがない。各人が持ち歌を落ち着いて歌える、この番組の構成とふん囲気は珍重すべきものがある。

一方で、同年10月25日付毎日新聞東京版朝刊に、「『にっぽんの歌』に望む」と題する以下の視聴者からの意見が載っており、番組名と内容のミスマッチを不満に感じる視聴者も存在していたことが伺える。

NETテレビ毎月曜「にっぽんの歌」をたのしみで見ているが、今までのところ、なつメロ歌謡曲などが主で少々がっかり。こういう歌が悪いとはいわないが、タイトルからすると、日本の民謡やわらべ歌など伝統的、純日本的な歌も登場していいのではなかろうか。

「にっぽんの歌」は「なつかしの歌声」や「帰ってきた歌謡曲」同様に歌謡曲（流行歌）を取り上げることが多かったが、第13回・第19回放送分において、「なつかしの歌声」及び「帰ってきた歌謡曲」に一度も出演していない奥田良三を出演に迎えたことは、「にっぽんの歌」の番組名に恥じない、真骨頂が発揮された内容であると評価したい。

## (2) 第40回～78回（昭和47年7月～48年3月）

### ①司会者

男性司会者は高島忠夫、女性司会者は第65回までが松尾ジーナ、第67回以降が磯野洋子で、切り替わりの狭間の第66回は高島一人で司会を務めている。

高島は歌手もこなす俳優であったが、「ショー番組の司会をずいぶんやっているが、意外にも歌番組のレギュラーは初めてなんだ。」(『週刊明星』昭和47年7月16日号)と紹介されており、前任の加東同様に歌番組の司会者はこれが初めてだったようである。

松尾は前年昭和46年に「気ままなジーナ」というレコードを出したことで知られていた当時19歳の若年タレントであったが、当時の雑誌記事・新聞記事では以下のように紹介されている。

これまでは、ナツメロがおおくりあげられていたけれど、ジーナというフレッシュ・アイドルの登場を機に、尾崎紀世彦、西郷輝彦など、いま売りだしの歌手を登場させる予定。

そのほか、ジーナの担当で「気ままなインタビュー・コーナー」がもうけられ、番組にバラエティをもたせる。

だから、ジーナも体当たりでやると、がんばっている。見てネ!! (『セブンティーン』昭和47年7月18日号)

「なつメロ? ほとんど知らないわね。わかんないものはわかりません。でも、あえて勉強はせず、私も楽しく聞かせてもらうつもり」

というジーナ。まさに“気ままな姿でゴメンナサイ”スタイルで登場だ。

このため、出演歌手が新曲をひろうするコーナーに<気ままなジーナのインタビュー>が設けられる。(『週刊平凡』昭和47年7月20日号)

“気ままな姿でゴメンナサイ”の松尾ジーナ、『にっぽんの歌』の司会に抜擢されて1か月たったが、「意外に日本語がうまい」の投書殺到に本人は目をシロクロ。(『週刊平凡』昭和47年8月3・10日合併号)

司会をするのは初めて。古い歌のことからインタビューのコツ、タイミングなど、いま体当たりで勉強中。(昭和47年8月28日付朝日新聞北海道版朝刊)

目下ナツメロや古い歌を猛勉強中ということだが、まだまだ“気まま”にやるまでは時間がかかりそう。(『近代映画』昭和47年11月号)

冒頭で取り上げた『セブンティーン』昭和47年7月18日号の記事には、松尾の写真の下に「初の司会役。ガンバルワ〜!」とのコメントがついており、高島同様に松尾も歌番組の司会は初めてであった。

果たしてなつメロを勉強したかどうかは定かではないが、なつメロ番組の司会者として非常に違和感を感じるこの松尾は、他局の生放送番組への出演をすっぽかした影響で芸能界を活動休止となり、途中で司会を降りることとなった。

TBSテレビ系毎週水曜の「歌と笑いでつっぱしれ!」は公開による生放送の番組だが、さる十三日の放送にレギュラーの松尾ジーナ=写真=が会場に現われず、TBSの担当者は、もう絶対ジーナは使わないとカンカン。(中略)

翌日になってやっと友達の家に行ったことがわかったが、その弁明によると、急に胃が痛くなり寝ていたという。連絡は友達に頼んだのだが、それが不徹底だったとのこと。

「ヤング企画」ではジーナを半年間、芸能界の活動を休止させるから、とTBSに謝ったが、このためNET系「にっぽんの歌」も年内(収録済み)でジーナの出番は終わりとなってしまった。(中略)

関係者は「近ごろの若いタレントの職業意識の欠如」を言うが、彼女のヒット曲「気

「ままなジーナ」を地で行かれたのでは困るというわけだ。(後略) (昭和47年12月18日付読売新聞東京版朝刊)

## ②番組構成

第40回～78回に関しては、国立国会図書館所蔵の台本が第66回分のみである他、新聞のテレビ欄で取り上げられる頻度も少なく、全体区分の中で一番情報量が少ない。数少ない新聞テレビ欄での紹介記事から判断するに、第1回～39回の時と同様に三部構成あるいは四部構成で進行していたようである。前ページの記事によると、松尾による「気ままなインタビュー・コーナー」が設けられたようであるが、詳細は不明。

また、前掲『セブンティーン』昭和47年7月18日号の記事からは出演歌手の若返りが図られたかのように読み取れるが、実際は第1回～39回の時期と比べて大幅に若返りが図られたわけではない。詳細は裏表紙裏のグラフを参照。

## (3) 第79回～131回 (昭和48年4月～49年4月)

### ①司会者

女性司会者は、戦前から李香蘭の名で女優・歌手として広く知られ、昭和40年代当時、フジテレビのワイドショー「3時のあなた」の司会者として活躍していた山口淑子が務めた。なお、第97回と第98回においては山口が夏休みを取得したため、代役を森光子(第97回)と高島忠夫(第98回)が務めた。

『週刊平凡』昭和48年4月5日号に、山口が司会を務めることになった経緯が触れられているため紹介したい。

山口淑子が『にっぽんの歌』(NET)で歌番組をはじめて司会する。『3時のあなた』の名司会ぶりと彼女のはなやかな経歴、スター性が買われての起用となったもの。毎回さまざまな中国服のファッションを見せてくれるのも楽しみのひとつ。

最近発声練習をはじめた彼女のこと、番組のなかでもおおいに美声を期待できる。

「得意の中国語と紫の中国服」と題した昭和48年6月26日付朝日新聞西部版夕刊の記事によると、山口の艶やかさがNETテレビの若いスタッフたちの憧れの的になっており、ラメ入りの紫の中国服に身を包んで現れた時は、スタジオ中の目を奪ったとのことである。

山口は一年間司会者を務めた後、「3時のあなた」とともに司会を降り、参議院議員選挙に立候補、当選し転身した(「山口淑子が、ついに参院選出馬を表明! =初めて語ったその胸中=」、『週刊平凡』昭和49年4月11日号)。

男性司会者は、政治評論家の藤原弘達(ひろたか)が務めた。

## ②番組構成

主に三部構成で、司会の藤原による“藤原弘達歌謡放談”が第二部または第三部にて毎週組まれたようである。その具体的な内容は、「2 放送記録」を参照されたい。

## (4) 第132回～182回（昭和49年4月～50年3月）

## ①司会者

男性司会者に加東大介が返り咲き、女性司会者が池坊保子、またレギュラーゲストとしてディック・ミネが加わった。『週刊明星』昭和49年4月21日号に詳しく紹介されているため引用したい。

NETテレビの歌謡番組『につぼんの歌』では、現在の司会者を4月8日から交代。山口淑子、藤原弘達から、加東大介、池坊保子、レギュラー・ゲストのディック・ミネの新メンバーに変更し、新しいスタートを切ることになった。

加藤大介は、すでにこの番組の初代司会者として、46年10月から9カ月間、司会を担当しており、その手腕のほどは定評のあるところ。

池坊保子は、華道池坊専永・家元の夫人で、ベストセラーの『夫とつきあう法』などを書いた才女タレントだ。

またまためぐってきた司会の役に加藤大介は、  
「なにしろ、2年半ぶりのことですからね、どうやって前と違う味を出そうかと苦心しています。ただ、この番組は大好きなので、古巣にもどった気分で楽しくやっていきたい」

と、いかにもベテランらしい抱負を語る。

この加東とコンビを組む池坊は、これが初めての司会。

「まったく白紙の状態です。歌は好き、なんですが、いつも二人の娘にバカにされるくらいオンチなんです。専門知識もゼロですから、とにかく男性お二人の足手まといにならぬよう頑張るつもりです」

ういういしい感想をのべれば超ベテランの万年青年、ディック・ミネは、  
「まあ、やわらかいほうの話は得意なんでね……何が飛び出すか分らんよ」

と、ニコニコ顔。

個性の異なる3人で組むこの司会、歌謡番組のファンには、結構なプレゼントになりそうだ。

初の歌番組司会を務めることとなった池坊は、夫の専永もTBSテレビの「娘とおやじ」というトーク番組の司会を同じ昭和49年4月から引き受けており、同時にテレビ番組の司会を始めたことが当時話題となった（「異色素人タレント”はこうしてスカウトされた！」、『週刊平凡』昭和49年5月9日号）。この記事の中で、池坊の司会ぶりが紹介されているため、引用したい。

保子さんのほうは、前任者・山口淑子のあとを継いだのだが、  
「私って、とても音痴なの。娘にも“ママがうたうと節が違<sup>ふし</sup>う”ってバカにされてる。それが歌番組の司会をやるんですから、ずうずうしいでしょ」

と口に手をやって、ほがらかに笑う。

ただし歌を聞くのとおしゃべりは大好きで、上流夫人だととりすましたところはない。たとえば、五木ひろしをスタジオで見かけると、「ああ、あの人が五木さんなの！」。あどけないファンのように、まじまじとみつめたりしている。

硬派の加東大介、軟派のディック・ミネという男性司会者にはさまれ、“素人っぽい

視聴者代表”といった司会ぶりが好評である。

1週に1度、録画撮りのため京都から上京してくるのだが、だれもお供を連れず、ひとりでポストバッグをぶらさげて現れる。

「スタジオに来るのがうれしくて、いそいそと出てくるんですよ、ホホホ」

和服への着替えも、手をかりずひとりでキュッキュッ。

気さくで美しい奥さんであるが、テレビ局のほうでは、「女性視聴者にどう見られているか」をちょっぴり心配している。(引用中のルビは原文のとおり)

「異色司会者」(『映画情報』昭和49年6月号)と評された池坊の司会ぶりに関しては、「司会者選び慎重に」との見出しによる視聴者からの手厳しいコメントが昭和49年5月5日付読売新聞東京版朝刊に掲載されている(本書56ページ参照)。

また、週刊誌にも酷評される始末であった。

視聴率を見ても“山口時代”は二ケタあったのが、四月以降は一ケタもしばしばと、不人気ははっきり。コンビの加東は、実はこの番組の初代司会者として大好評だった実績もあるだけに、原因はやはり彼女か……。

新司会者といえ、夫君の家元、池坊専永氏の方も、TBSテレビ日曜早朝の『娘とおやじ』で四月から司会を受け持っており、“華麗なる夫婦競演”と大評判だったが、こちらも同じく、四月以降視聴率が下がっている。お気の毒な夫婦である。(『週刊サンケイ』昭和49年6月14日号)

かくして池坊はわずか10回で司会を降りることとなった。その経緯が2つの週刊誌で取り上げられているため紹介したい。

NET『につぼんの歌』(月曜午後9時~10時)のホステス池坊保子いけのぼうやすこさんが、6月17日から河内桃子に替わった。その理由を

「池坊さんは池坊流そうけ宗家夫人として華道界のトップレディーの地位を占めるかたわら、家庭では2児の母親でもあり、同時にタレントとして活躍するなど、いろいろと忙しすぎました。京都に住んでいて、この番組のため週2日上京してみえましたが往復のしんどさもあって、1クール(3か月)の区切りを待たず、彼女のほうから司会をやめたいと申し出がありました」

と、NET側は説明している。(「トップレディーも司会者落第?」、『週刊平凡』昭和49年7月11日号)(引用中のルビは原文のとおり)

彼女、この四月からNETの『につぼんの歌』という、ナツメロ番組の司会者として登場したが、わずか二カ月あまりで、早くも“降板”。担当プロデューサーによると、「何しろ多忙な方で、あらかじめ、いつでもおやめになって結構です、と申し上げてありましたから……」

ところが、ある関係者は、「とにかく視聴率が上らない。視聴者からの投書や批判はヤイノヤイノと来るし、結局“お引取り”願うことになったんだよ。」と、だいぶニュアンスが違う。

「庶民派の加東大介がナツメロを紹介しても、あの人はニッコリと“私、存じません

わ”っていったのけるんですからね」「彼女の着物、いいものなんでしょうけど、趣味が悪いわ」——と、茶の間の主婦も手厳しい。

半分は上流夫人への嫉妬<sup>しつと</sup>としても、どうやら“司会者失格”は間違いないところ。局内には、「他流派のイヤガラセじゃないか」なんて声も出たそうだが、じゃあ、今度は各流派の家元夫人を順に登場させたら？（「NETから降ろされた？ 池坊保子」、『週刊新潮』昭和49年6月13日号）（引用中のルビは原文のとおり）

池坊の後任には河内桃子が抜擢された。前掲『週刊平凡』昭和49年7月11日号に経緯が書かれているため紹介したい。

後任に河内桃子が選ばれたのは、

「番組の内容が落ち着いたものだし、“なつメロ”的な歌も多いので、世代感のある生活経験の豊富な人ということで彼女を起用しました。いやみがなく、適度に庶民的で、適度にエレガントで、加東大介さんとのコンビネーションもいいですよ」（土屋順二プロデューサー）

当の河内桃子は、「歌の司会は初めてですが、ゲストの歌手のかたに楽しくうたっていただける雰囲気をつくるようにしたいと思います」と、抱負を語っているが、くれぐれも2度と「誤算だった」などといわれぬようお願いしたいものだ。

後任の河内は無難に司会を務め上げたようである。

女優、声優、ワイドショーの司会と多才な河内桃子も歌番組の司会は初めて。が、昔馴染みの加東大介とコンビを組むとあって、「初めっから大船に乗ったつもりで」気負わず、マイペースでやれたとか。

二カ月前、初めての録画撮りの日「芝居とちがって、つukらない私がだされば……」と抱負を語っていたが「今は楽しくてしょうがない。番組柄、出演なさる歌手のみなさん、大人でしょ。会話に苦労しませんね」と明るい表情だ。（『週刊TVガイド昭和49年8月9日号』）

毎週月曜日夜九時、NETにダイヤルを合わせると“にっぽんの歌”という真面目番組をやっている。河内さんは加東大介さんと二人で、その司会役。おっとりした持味をただよわせている

「舞台のあるときは松島トモ子さんが代わって下さるの。そういうお約束になってまして……」とすまなそうな顔になる。ことし、河内さんは女優さんになってはじめて年三本も舞台に出ることになった。この秋はチェホフの『かもめ』がある。“にっぽんの歌”をときどきお休みするのは、舞台優先の建前から。でも、歌は好きである。一番耳にこころよいのは、子守唄。小さいとき、お母さんにうたってもらった子守唄の歌声をハッキリ記憶にとどめている、という。（『サンデー毎日』昭和49年8月18日号）

実際、第144回～146回は舞台公演のため、河内の代役として松島トモ子が司会を務めている。

30年間病気知らずであったという加東は、第178回の「小野田寛郎こころの歌」を昭和50年2月17日に収録した直後の同月21日、体調不良により入院することとなった。そのため、3月放送分の第179回より休むこととなったが、いったんの最終回となった第182回「歌祭り！花の饗宴」には病院からかけつけ司会を務めた。

『につぼんの歌』は、メイン司会者の加東と河内桃子のほかに、ゲストのレギュラーに歌手のディック・ミネを迎えている。そのため、「加東さんが休演されるからといって別の司会者を立てることは考えていません。河内さんとディック・ミネさんのふたりに、全面的にカバーしてもらうことにしました」（NET制作担当スタッフ）。（「加東大介がゲッソリやつれて緊急入院！」、『週刊平凡』昭和50年3月20日号）

この時期には過労による肝炎と報道されていた加東であったが、実際には結腸癌であり、回復叶わず同年7月31日に64歳で死去した。

## ②番組構成

第79回～131回の時期と同様に主に三部構成で、メインゲストのディック・ミネによる“ディック・ミネ歌謡談義”が第二部または第三部にて毎週組まれていたようである。その具体的な内容は、「2 放送記録」を参照されたい。

## ③番組への反響

本書150ページで引用した『週刊サンケイ』昭和49年6月14日号の記事からは、池坊の司会時期に視聴率で苦境に立たされていたことが分かるが、司会が河内に代わってからは立て直したようである。朝日新聞記者による記事と、京都新聞に寄せられた視聴者からの投書をそれぞれ紹介したい。

「ジャリ・タレントの下手な歌なんか聞いちゃおれん」という不平派には、この歌謡番組がぴったりだ。山口百恵や郷ひろみは登場せず、今夜の場合なら、ディック・ミネや灰田勝彦、小林旭や伊東ゆかり、若くても水前寺清子や園まり、という具合だ。「年寄りばかりじゃないか」という皮肉派もいるかもしれないが、放送局のふれ込みは「歌唱力のある本格派ばかり」だ。

「東京の屋根の下」や「ギターを持った渡り鳥」のように、のんびりしたテンポの歌が多い。カメラワークがそれに合わせて、ゆっくり。その技術がいい。奇抜な構図や急激なズームアップを避けている。この時代にこうした地味な番組を作ることは、意外に勇気がいるのかもしれない。加東大介と河内桃子の司会も、お祭り騒ぎにならないよう控え目だ。（「珍しいゆったり番組」, 昭和49年12月9日付朝日新聞東京版朝刊）

近畿テレビ「につぼんの歌」（月曜夜）に登場する一流歌手の歌はわれわれにはなんとしても魅力がある。時代の変化もさることながらノド一筋に生きてきた昔からの生まじめな動作、容姿には好感が持てる。

戦前の歌手たちもいつまでも健やかに元気で活躍してほしいものだ。そしてこの時間も長くつづけて歌謡界の歴史を深く刻みつけてくれることを祈っている一人である。（「魅力ある『につぼんの歌』」, 昭和50年1月28日付京都新聞朝刊）

## (5) 第183回～213回(昭和50年9月～51年3月)

## ①5か月ぶりの番組復活

「にっぽんの歌」は、加東大介の病気回復を願う昭和50年3月24日放送分をもって終了した。しかしながら、わずか5か月後に番組が復活した。そのあたりの事情が昭和50年8月4日付朝日新聞東京版夕刊に『「にっぽんの歌」復活』との見出しで取り上げられているため紹介したい。

数少ないなつメロ番組で好評だった「にっぽんの歌」(NET系)が、九月から復活する。

実は、いま放送されている朝日—NET系ドラマ「霧の感情飛行」(月曜よる9・0)が、関西では十四、五%(ビデオ・リサーチ調べ)と高い視聴率をかせいでいるが、関東では四～五%とさっぱり。そこで、ドラマを八月いっぱい打ち切ったあと、九月からこの時間帯で放送しようというわけ。

さきの司会は、故加東大介と河内桃子のイキの合ったコンビだったが、こんどは神山繁、三ツ矢歌子に代わる。レギュラーに作曲家の遠藤実を迎えるので、演歌調がより強まるようだ。

また、『週刊明星』昭和50年8月10日号にも、「ファンの要望にこたえ『にっぽんの歌』再登場 大人の歌謡番組が復活」との見出しにより、番組復活の経緯が詳細に記されている。

昭和46年10月スタート以来、3年半にわたり大人の歌番組として人気を集めて来たNET『にっぽんの歌』が視聴者の要望にこたえて再スタートすることになった。

この番組は、かつて好調なときには20%という視聴率をかせぎ、低迷している歌番組の中ではかなり健闘していた。また、ヤング一本槍の最近の傾向の中で大人を意識した番組づくりも好評でファンも多く、4月の編成がえのあおりをくって打ち切られたときには視聴者からの抗議もよせられたほどだった。

局の方でもこの番組の中止は心のこりだったようで、この9月からファンの要望にこたえて異例の再スタートとなったわけ。

(中略)

もともとこの番組は歌手の方からも積極的に出演を希望する例が多く、春日八郎、北島三郎、三橋美智也などは常連。都はるみ、青江三奈、水前寺清子、ちあきなおみらもしばしば登場していた。

秋からの再スタートで、またこういう歌手たちの歌う“大人の歌”がたっぷり聞かれると、たのしみにするファンも多いことだろう。

『週刊TVガイド』昭和50年9月5日号においても、「日本人の心にしみる歌」をキャッチフレーズに、一時休んでいた『にっぽんの歌』が再スタート。」と紹介されている。

なお、番組放送直前の昭和50年8月20日付読売新聞東京版朝刊には、「“小学唱歌”の特集も」との見出しによる視聴者からの投書が掲載されている。

NETテレビで九月から復活する「にっぽんの歌」について希望をひとつ。歌謡曲ばかりでなく数か月に一度は季節感あふれる小学唱歌・抒情歌の特集を切望します。

## ②司会者

男性司会者が神山繁、女性司会者が三ツ矢歌子、またレギュラーゲストとして遠藤実が加わった（遠藤は第203回放送分でレギュラーゲストを降りている。）。そして、視聴者からのリクエストの手紙を読み上げる“思い出の歌”コーナーでは奈良岡朋子がナレーターを担当することとなった。

前ページで取り上げた『週刊明星』昭和50年8月10日号では以下のように紹介されている。

司会グループには、進行役として神山繁、三ツ矢歌子という異色のコンビを起用し、作曲家遠藤実氏をレギュラー・ゲストに迎えて、貧困から身を起した豊富な人生経験を生かす、“心の歌”のコーナーを設けた。また視聴者からよせられた“思い出の歌”のコーナーでは新劇のベテラン奈良岡朋子が感動的なナレーションを担当する。

三ツ矢が司会を引き受けた経緯は、「他の番組にも司会の話がかかったが『歌だけにしぼったオトナの番組なので、こちらをお引き受けしたんです』（昭和50年12月1日付朝日新聞大阪版夕刊）とのことである。

## ③番組構成

引き続き主に三部構成で、メインゲストの遠藤が、ゲストの歌手とのやりとりを中心に、ヒット曲にまつわるエピソードを加えながら心の歌を探っていく“遠藤実こころの歌”コーナーを受け持った。また、奈良岡朋子がナレーションで視聴者からのリクエストの手紙を読み上げ、ゲストの歌手に思い出の歌を歌ってもらう“思い出の歌”コーナーがあった。

## ④その他

第183回～213回の時期に自身が出演することはなかったが、昭和10年代から歌手として活躍していた霧島昇が、東京12チャンネルの「心で歌う50年」とともにこの番組を毎週録画していたことが、『週刊TVガイド』昭和50年9月26日号に、夫人の松原操による証言として記載されている。

## (6) 第214回～239回（昭和51年4月～51年9月）

### ①司会者

女性司会者は引き続き三ツ矢が、ナレーションも引き続き奈良岡が担当したが、男性司会者が曾我廼家明蝶に交代した。昭和51年4月5日付朝日新聞大阪版夕刊には、以下のように紹介されている。

芸歴50年の明蝶だが、司会業はこれが三度目。同じ司会の三ツ矢歌子とは、もちろん初顔合わせ。ひと味違ったオトナの歌謡番組をねらうそうだが、明蝶は「私は私なりの特色を出したいですなあ。たまには酒でも飲んで脱線するかも……地でやらせてもらいます」と、抱負を語る。

## ②番組構成

引き続き主に三部構成で、視聴者からのリクエストによる“思い出の歌”コーナーも継続していた。

### (7) 第240回～265回（昭和51年10月～52年3月）

#### ①司会者

男性司会者が有島一郎、女性司会者は第142回～182回の時期にも司会を務めていた河内桃子に交代した。ナレーションは引き続き奈良岡が担当した。

## ②番組構成

引き続き主に三部構成で、視聴者からのリクエストによる“思い出の歌”コーナーも継続していた。

### (8) 第266回～291回（昭和52年4月～52年9月）

当番組の制作局は、この前月まで「株式会社日本教育テレビ」（略称：NETテレビ）であったが、4月より社名変更し「全国朝日放送株式会社」（略称：テレビ朝日）となった。

#### ①司会者

第97回で山口淑子の代理で司会を務めた経験のある森光子が単独司会者となった。「『ときには私もマイクを持って、演歌からロックまで歌いますよ』とノッている。」（『週刊明星』昭和52年4月10日号）との記事が示すように、他の司会者と比べ、番組内で自ら歌を歌う頻度が多かったことが特徴と言える。

また、サンフランシスコ・オペラハウスからのアメリカ公演（第278～279回）の際には、森とともに松山英太郎が司会を務めた。

## ②番組構成

主に三部～四部構成で、新曲コーナーもあった。

### (9) 第292回～317回（昭和52年10月～53年3月）

#### ①新番組としてのスタート

第291回が放送された昭和52年9月26日の新聞紙面には、「につぼんの歌」が“最終回”とクレジットされている。実際、『テレビ朝日社史 ファミリー視聴の25年』の年表において「につぼんの歌」は「46.10.4～50.3.24, 50.9.1～52.9.26」と記述されており、この日が最終回であったというのが公式見解でもあることが分かる。

一方で、その翌週の同年10月3日の紙面には、以下のように紹介されている。

小野寺昭、今陽子、宍戸錠の司会で、歌謡曲の“スタンダード・ナンバー”を中心に、スター歌手の魅力を披露し、幅広いナツメロ愛好視聴者におくる歌謡番組。（「花のスタジオセブン『前夜祭I!!』」, 読売新聞東京版朝刊／毎日新聞東京版朝刊／朝日新聞大阪版朝刊※／中日新聞朝刊）

※朝日新聞大阪版朝刊の見出しは「花のスタジオセブン」

小野寺昭、今陽子、宍戸錠の司会で、歌謡曲の“スタンダード・ナンバー”を中心に、スター歌手の魅力を披露する歌謡番組。（「新にっぽんの歌・花のスタジオセブン『前夜祭 I !!』」，朝日新聞名古屋版朝刊）

読売新聞東京版・毎日新聞東京版・朝日新聞大阪版・中日新聞においては番組名が「花のスタジオセブン」となっている一方、朝日新聞名古屋版においては「新にっぽんの歌・花のスタジオセブン」という番組名となっており、実質的には「にっぽんの歌」が継続されていたことが伺える。このことは、昭和52年11月14日～12月5日放送回が、「にっぽんの歌」通算三百回を記念した特集となっていることから明らかである。

番組名変更の経緯は、昭和52年10月21日付読売新聞東京版夕刊の記事に「森光子が司会を降り、ピンキー・小野寺昭・宍戸錠のトリオ司会で若返りをはかって『花のスタジオセブン』を出した」とあり、若返りを図った結果と思われる。なお、国立国会図書館所蔵の放送初期の台本には、収録場所が「NET オセスタジオ」と表記されているが、「花のスタジオセブン」の番組名は、当番組の収録を第七スタジオで行っていたことからきているものと推察できる。

## ②司会者

小野寺昭、今陽子、宍戸錠の3人が司会を務めた。小野寺は当時「太陽にほえろ！」にレギュラー出演していた俳優、今陽子はピンキーとキラーズからソロに転向していた歌手であり、司会陣の若返りが図られた。

当時の雑誌記事において以下のように紹介されている。

内容も司会者もガラリ一变。司会は、前回の森光子から小野寺昭、今陽子、宍戸錠にバトンタッチ。中でも初めて司会にチャレンジする小野寺は、「話があつて半月ぐらい悩みました。で“太陽にほえろ！”のボス（石原裕次郎）に相談したら、“ぜひ、やったら”とすすめられ、決心しました」。小野寺は、レコードも出しているし、コンサートも年十回くらい経験している。

「ラジオのD・Jもやっていますので、ある程度の自信はあったのですが……。番組でボクも歌うことになってますが、これも初めて。オリジナルの“旅でもしようか”を歌うつもりです」。

内容の目玉は①わが青春の歌——新時代のナツメロ、昭和三十年代後半～四十年代の歌。②今週のとおき——めったに見られないVTR、フィルム紹介。第一回では五年前の王選手が歌うフィルムも登場。（『週刊TVガイド』昭和52年9月30日号）

うちではほかに『新にっぽんの歌・花のスタジオセブン』で司会に小野寺昭を起用したんです。出演交渉したとき、「しゃべるのが苦手だから」といことは彼は断わったらしい。それを無理に口説いて出演してもらったんですが、彼はレコードも出しているでしょう。プロデューサーが彼にうたわせようとしたら「うたうなら司会しているほうがいい」って。今陽子も司会していますが、彼女はいまだこのレコード会社にも所属してないので司会はやりやすいみたい。自分のレコードが出ているときに、他人の

歌を紹介したり持ち上げなければならないときって、やりにくいそうですね、歌手で司会する人は。(『週刊平凡』昭和52年11月10日号)

### ③番組構成

番組構成は前掲『週刊TVガイド』昭和52年9月30日号の記事において言及されているが、実際に新聞のテレビ欄を追っていくと、出演者がゆかりの深い人物と対面する“ラブ・スポット”コーナー、司会の宍戸が新曲を分析する“錠さんのヒット曲狙いうち”コーナー、出演者のミニワンマンショーの“花のリサイタル”コーナー、“今週のオリジナル”コーナー、“思い出の歌”コーナー、“今日だけのオリジナル”コーナー、新曲コーナーなど、各回ごとに多彩なラインナップを送っていたようである。

### ④番組への反響

昭和52年10月21日付読売新聞東京版夕刊の記事によると、若返りをはかったものの「考えすぎがたたってか、客を逃して第一回は4.2%だった」と、視聴率が芳しくないスタートであったことが示されている。また、番組開始2か月後の昭和52年12月14日付読売新聞東京版朝刊に掲載された記者によるコラムにも、「スタート以来、どうもいま一つ魅力に乏しいうらみがあったが」とあり(本書132ページ参照)、苦戦していたことが伺える。

## (7) 第318回(昭和54年1月)

### ①放送の概要

「水曜スペシャル」は、当時テレビ朝日系列が概ね毎週水曜日19時30分～20時51分まで放送していた単発特別番組枠であり、各種バラエティー番組やドキュメンタリー番組などが放送されていたが、昭和54年1月3日は、30分拡大して19時から「にっぽんの歌」の特集を放送した。

なお本書においては便宜上“第318回”と表記したが、実際に放送回としてカウントされたかどうかは不明である。

### ②司会者

高峰三枝子が一人で司会を務めた。